

齒專同窓の森山賢一氏によって閉会の辞が述べられたのは3時頃であったろうか。講演の①国民医療法について（厚生省衛生局長加藤於菟丸氏）②時局講演（海軍中佐上田俊治氏）を終ったのが4時半だった。」と当時を回顧している。

一方、中原 泉教授はその著「現代医歯原論」により「医歯二元化が決まったのだという結論だけではなく、それがどのような経緯でどうして決定したかということの結末を知ることが大切なのである」と、更に「なかでも、昭和17年国民医療法設定時における医歯一二元運動は、最大のものであった。国民医療法とは、戦時体制下に国民の一致協力を企図として、医療関係法規を統合した法律であったが、それが議会を通過すると、歯科界に疾風のように言論論争が吹きあれた。…医歯の区別を廃止して歯科医師に医師の資格をあたえたうえで、歯科医業をおこなわせようという一元論（日歯医専、日大専歯、大阪歯医専ら歯科医学専門学校同窓会連合会）と、歴史的経過と諸外国制度からみて、医学的部分にのみとられず、現制度下で独自の制度充実を計るべきという二元論（東歯医専同窓会）の対立、論文やパンフレットが飛び交い、口角泡をとばす論議がかわされた。けれども内容的には明治の焼き直しにすぎず、歯科界のなかだけでの議論に終始し、なんの裏りもなく一過性の熱病のようにじきに消失してしまった。医歯問題がけっして解決しきっていないことを我々にハッキリ教えてくれた。」と記述している。しかし今田見信先生は「いまからこの聯合同窓報国大会を思い起こす場合、①当時大論戦の一元論の体制堅め、②日本歯科医師会に対する不平の爆発、③不参加同窓による圧迫の反動を見逃すわけには行くまい。かようにして永年つちかわれてきた血協政権が一皮ずつはぎとられて、歯科医政の中心が、敗戦→追放などから加藤清治氏に、次は佐藤運雄氏に移行することになったのではあるまいか。日本歯科医師会が佐藤運雄会長になってからは、各同窓に椅子を割り当てる方針を強く打ち出したことは、聯合同窓報国大会にイデオロギーを受け継いだ一つの政治のよりどころとなったように思われる。戦後、日本歯科医師会

の主は佐藤→入交→小椋→佐藤→河村→中原と幾たびか変わったが、そのたびに各同窓への役の割当が注目される現状は“民主的だ”と簡単に割り切れない歴史があるように思われる。」と考証している、そこで演者らの一人の谷津の蔵する、日本歯科医学専門学校内歯科医学専門学校同窓聯合会、原 房吉発行兼編輯人、「歯科医学専門学校聯合同窓報国大会経過報告」（昭和17年6月25日発行、非売品）を資料として約30年前の歯科医学界を振り返ってみたい。

本資料は、12.5×18 cm 大29ページの小冊子で表紙の裏表紙に本大会に参加した、大阪歯科、京城歯科、京北歯科、九州歯科、東京高等歯科、東洋女子歯科、日本歯科、日本女子歯科、日本大学歯科、広島女子高等歯科の10校の代表者の氏名が五十音別に掲載されている。

52) 中原市五郎先生と FDI（誌上発表）

Ichigoro Nakahara and FDI

日本大学松戸歯学部 ○谷津 三雄
中村 一
池田 直
門平 光信

Mitsuo Yatsu, Hajime Nakamura, Sunao Ikeda and Mitsunobu Kadohira, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

「日本歯科大学60周年誌」の「中原校長の渡欧」の項に「日本に於ける歯科界は、国際歯科医学大会を日本に招致し得る状況に進めるを機として、昭和6年1月30日中原校長は第9回国際歯科医学大会を日本に招致すべき相談会を開き、又2月14日麴町区富士見軒に中原校長の名を以て東京歯科以下全国8校の代表者を列席せしめ協議の結果「5年後（昭和11年）日本に於て国際歯科医学大会を開催、その2年前にFDIを開催することを決議した。この主旨に基いて、更に3月10日、各歯科学校長は勿論、口腔病学会（島峰 徹）をはじめ、全国歯科学会代表者及び東大歯科（都築正男）をはじめ全国14の歯科部長を日本教育会館に

会合して FDI 及び国際歯科会議の招致に対して協力を得た。然るに其の後この問題は或る事情のため協力を欠き、実現するに至らなかったのは遺憾である。しかし中原校長が国際的な歯科の大会を日本に招致するため極力努力したことは大いに認めなければならない。かくするうち昭和6年5月中原校長は文部省より、日本代表として、又日本歯科学会を代表してパリに於ける第8回万国歯科医学大会に出席するよう、更に内務省よりは欧米の口腔衛生状態視察を命ぜられ同年6月18日鹿島丸には神戸出発、渡欧の途につかれた。…パリ停車場には、万国歯科医学大会々長でありフランス歯科医師会々長であるブイラン氏その他が先生の一行を出迎えたが、これは異例に属することである。万国歯科医学会は8月2日より開始せられ、先生は8月4日第16分科会に於て「日本に於ける歯科界の現状に就て」講演し、会衆に日本歯科界の状況を強く印象せしめた…」と記載されている。

一方、周知の如く昭和58年(1983)11月14日から20日までの7日間にアジアで最初の第71回FDI年次世界歯学大会が東京で開催された。その大会趣意書に「FDIとは創設当初(1900)からわが国の歯科界と関係が深く…かつてわが国で開催される予定となっていました、第二次世界大戦の余波を受けて中止となり、戦後しばらく活発な交流がなかった」とあるが、その過程については書かれていない。そこで、中原市五郎著「欧米の旅」を資料とし、中原市五郎先生とFDIとの関係を中心に報告したい。本書はパリで開かれた万国歯科会議並びに万国歯科医学大会に出席した翌年の昭和7年8月1日に先生が執筆されたもので15.0×22.0cm大、32ページよりなる洋本である。1.行程、2.旅行中の印象と偶感、3.外遊詠草、4.欧米に於ける歯科教育の概況、5.児童歯科衛生に就て、6.第八回万国歯科会議出席記よりなる。行程は6月16日東京駅出発から11月12日横浜帰港までの全日程が詳細に記されているが、極めてエネルギーな訪問には深く敬意を表するものである。第八回万国歯科会議出席記に「近年我が国に於て、多くの国際的会合が相次いで催さ

れ、旁々諸般の学術会合が、頻繁開催せられつつある現状に鑑み、次回の第9回国際歯科医学会議を日本に於て開催するを得は嘗に我国の歯科医学の進歩発達、歯科医師の地位向上に資するのみならず国家に貢献するところ大なるべきことを想ひ、自ら遠くパリに赴き、同連盟当事者に向って次会議を日本に於て開催するよう尽力を希望し正式に其の申入を為したのである」当時、既にオーストリー、カナダ、日本と3ヵ国からの申し込みがありFDIの最高幹部は次回はオーストリーに於て開催することに決定した。その理由として、1.欧州戦争後、英仏語を語る国民と独逸語を語る国民との間に兎角感情の上に打解け難い隔てを生じ、而も大戦後の会議は2回目であり、戦勝国側で開催したのであるから、国際平和の為に、次回をオーストリーに於て開催するを至当とする。2.欧州戦争後各国共に経済的打撃の回復が不十分であり、又日本に於ての開催は遠路の為、自然と出席者少数であらう、かくては国際的会合の真意に添はぬ事となろう。3.日本は今日迄、万国歯科会議の最高委員会並に各種委員会の年次会を開いた事がない。以上最高幹部の意見は、終に委員会を通過して余輩の希望は実現し得なかったのであった。第3項の日本に於て従来、FDIに関する何等の仕事をも為し居らぬと云ふ事情は、今後口実とならぬやうに、次回なる第9回の開催迄の間に一度、日本に於て年次会を開催し度き旨の申込みは正式に手続を了して置いた。次で8月8日のFDIの最終総会に於て、日本の最高委員2名を3名に増員することに決し、余は正式に最高委員として推薦された旨の報告を受けた」などは日本におけるFDI史上重要な史実として銘記されなければならない。

なお、FDIは現在国際歯科連盟と和訳されているが、当時は万国歯科会議が使用されていたことを知る。